

『方等部古品曰遺曰說般若經』に就いて

境野黃

洋

## 「方等部古品曰遺日說般若經」就にして

「出三藏記集」の支婁迦讃譯經目録の中に

「方等部古品曰遺日說般若經」

といふ經名が載つて居る。註には「今闕」となつて居るから僧祐の時には既に存在して居なかつたものゝ様である。尤も「今闕」の二字を、道安の註とし、道安の時に既に闕失して居たものゝ如く言つてる人もあるが、實は此等の註は皆僧祐の加へたもので、「道安錄」には、現見しないものは、錄中に載せてはなかつたものだと思ふのである。

然るに此の「方等部古品曰遺日說般若經」とは、經名に頗る疑があるので、此の經名の意を知るに苦しまざるを得ないものがある。それは文字通りに、最初の古品まで五字を、方等部の經典で古經典であるから「方等部古品」と言ふのには、何等怪しいことはない様である。ところが「方等部」といふのは、所謂 *Vaiḍūrya* に屬する經典であるから、大乘經典は、つまり皆方等部なのである。然るに此の經典に限りて、何故に特別に「方等部」を冠せなければならなかつたのか、之を解くことが出來なければ、さう簡単には、之を文字通りに見ただけでは通過し得ない理由があるのである、それから更に「古品」の二字に就いても、古品は古經といふことに過ぎないけれども、古經は新經に對する語で、新經のないのに古經といふ稱呼のある筈はない。若し古い翻譯と言ふ汎稱ならば、安世高や支婁迦讃の譯經等は皆古品

である。此の經に限りて、何故に「古品」の二字が入用であつたのか、是れも確に怪しむべき一つの疑問である。

次ぎに經名の本體として「遺日說」とは何のことか、或は「曰」の一字も經名に加ふるといふ説もあるが、さうすると「曰遺日說」となる。これは果してどんな意味になるであらうか。此の幾多の疑問に就いては、未だ説明の試みられたことがない。誠に不思議な經名である。

之について私は「支那佛教史講話」や「支那佛教史の研究」に於て、此の經名は、道安の經錄に最初に出たものが轉々と寫傳さる間に、文字の磨滅不明の結果、種々の誤寫謬傳を生じたもので、恐らくは根元の名は、

### 「方等即遺曰羅般若經」

とあつたものではあるまいかと想像したのである。更に之を言へば、經名は「遺曰羅般若經」で、遺曰羅は *Vaipulya* の音譯であつて、ヴィブルヤは方等（或は方廣）と譯せらるゝ言葉であるから説明的に「方等即遺曰羅」としたものであらうといふのである。今にして思ふに、これ或は寧ろ、誰か *Viipulya* の傍註に「方等部」と註して置いたものが經名の本文に入り込んだと見た方が隱當であつたかとも思ふ。故に今は訂正して、「方等部」をやはり「方等部」と文字通りに解して置くことゝしやう。

「古品」の二字に就いては、到底解釋がつかなかつたので、遺曰羅の、上の「遺曰」が、「古品曰」と誤られたものと見るのである。「曰」には問題はないが「遺」の字が、果して「古品」の二字とどうして誤られるかと言ふと、私は

「貴」の上部が「共」の草體とし、「古」と讀まるることは、あり得ると思ふのである。尤も此の場合、文字の磨滅による判讀と豫想すべきことは勿論である。同じく「遺」の下部、退の「共」が磨滅し、或は僅に下部が薄く存したとしても、品の草體「共」と判讀せらることがないとは言へないと思ふのである。「遺日」の「遺日」の誤りであることは、説明を要するほどのことでもないが「遺日說」の最後の「說」はどうして出て來たのであらう。これは「遺日羅」の「羅」字の下部の草體なる證が說（木板に説）と誤られたものではないかと見るるのである。此の場合「羅」の上部の「四」はどうなつたかといふと、多分「四」も「日」となり、隨つて「遺日日說」と日が重なることになつたので、一「日」を穴字として省いたものではあるまい。これは私の想像である。

斯う言ふと、頗る牽強であり、強辯である如く見られないでもあるまいが、それが誤寫展轉であると見る限り、斯うでも説明しなくては、解釋がつかないのである。然らば何故にこれが「遺日羅」だとして、之に合せんとし、かゝる誤寫說を持ち出したかと言ふと「遺日羅摩尼寶經」の文に

「若有<sub>二</sub>菩薩<sub>一</sub>、欲<sub>レ</sub>學<sub>二</sub>極大珍寶之積<sub>一</sub>遺<sub>レ</sub>日<sub>一</sub>羅<sub>二</sub>經<sub>一</sub>、當<sub>二</sub>隨<sub>一</sub>是<sub>二</sub>經<sub>一</sub>本法<sub>二</sub>精進<sub>一</sub>上<sub>〇</sub>」

とあるにより、經名の「遺日羅」は、此の本文の「遺日羅經」と同一であるといふことを知つたと共に「道行般若經」に、

般若波羅密、摩訶滄悡拘舍羅、及摩何惟曰羅

と三語を重ねてあるのを見て「遺日羅」は、こゝに「惟曰羅」とあるのと、同一であるといふことを知つたからであ

る。般若波羅密(*Prajñāpāramitā*)は言ふまでもなく智恵度であり、漚起拘舍羅は*Upāyakāśolyā*、譯して方便と言ひ、惟曰羅は即ちヴィブルヤであつて、惟と遺とは、同音異字の充當であることは、言ふまでもないことである。之によりて遺曰羅は勿論遺曰羅であることに、異義がないものと信ずるのである。

然るに最近に至り「佛教學研究室」第二號（大正大學佛教研）（大正大學佛教研）に、許永鎬氏は、此の經名に對する新研究を掲げ、私の考を全然否定して居るのである。其の要旨は「方等部古品」に就いては、何等疑を挿むべき理由なきものとして、文字通り其のまゝに之を認め、其の以下のところは「遺曰說」ではなく「曰遺曰說」であるとし「曰」字を、經名と離すべからざるものと認め、即ち經名の本體は「曰遺曰說般若經」といふべきだとし、これはつまり「金剛般若經」の最初の譯經だと斷ずるのである。何故之を「金剛經」と見たかといふと、曰はヴ、遺はジ、日はラといふ音があるから、これはヴジラ *Vajra* 即ち金剛であるし、「說」は左の音に當るもので (*Cchedikā*) を音譯したものである。完全にはヴジラ ツチエデカ一 (*Vajracechdika*) となるといふのである。是は着想の頗る面白い説であるが、唯「曰遺曰說」をヴジラ ツチエデカ一の音譯としたのは、餘りと言へば、附會の感を免れない。成程曰のワは承認するとしても、遺をジ、日をラと言ふに至りては、決して穩當なる説ではない。此の説によると例へば「遺」はイで、これは「贈る」「與へる」意味になる。故にジと發音したと見られる。又「日」は、朝鮮音イル(*il*)である。日本音はニチ、ジツであるが、支那音のル(L.R)で終る音は、日本音大低ツで終つて居る。佛は朝鮮音ブル、日本音ブツ、薩は朝鮮音サル、日本音サツ等々支那の現代音は、佛はフオ、薩はサーであるが、これはルの終音が消滅したのである。此の消滅した終音は、「日」字

では、イル、或はイド、又はアル、アドなどと言つたやうな、朝鮮音の方ではラ行音日本音の方ではタ行音に近いものと推定せらるゝから、結局「曰遺日」は、ヴジに、イル、アル或はイド、アド等を加へたものになる。これがヴジアルとなつてヴジラとなるとわけがあると言つた様な筋路の解釋で、最後の結論は、「曰遺及遺般若」即ち *Vajracchedikā-prajā pāramitā* となり「金剛般若經」となるのだといふのである。

私の經名の寫誤傳來說も、少々廻りくどいのであるが、之より一層廻りくどい發音の調査で、どうやらこれが「金剛般若」まで漕ぎつけたとは言ふものの、どうしてもこれは一種のこじつけであるといふ非難は免れないものである。發音上よし斯うもすればなるとは言ふものの、全體左様な發音によつて、梵音を寫したといふ實例が、外に一つでもあるかと言ふことを反省しなくてはならない。例へば「遺」は(j)ジといふ音にも出る、故に梵語の音譯に、之を梵音のジ(j)といふ音に充當したといふ例が、一つでもあるか、斯う考へると、絶対に無いと斷言し得るのである。「遺」はヴィ或はヴィに充當し「維」と同一音に使用せられて居ることは一般的の様である。「日」の字が、ラ (l.R.) の音譯に用ひられて居るなど、いふことは、到底想像も及ばないことで却つてジ音に充當せられて居ることは、跋日羅を *Vajra* に充てゝあるのでも知らるゝのである。よしそれが本經の譯者たる、支婁迦讖にのみの特殊なものであるとしたところで、支婁迦讖の譯經中に、外に一つでも、ラを「日」としたところが果してあるであらうか。支婁迦讖は、支那譯經者として最初の人であつたが、其の天才的の苦心の効果は、梵音の音譯或は支那的意譯の上に於ても、殆ど後代の模範となつたもので、勿論多少の變化はあつたにしても、甚だしいかけちがつた、とてつもない譯はないものである。ラ音の音譯の如きも、例へば阿羅漢、恒薩阿竭阿羅訶、阿耨多羅三耶三菩、提 墓羅佛(*Dipamkara*)、毘盧拘舍羅、其の外八部衆中

の阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等例外なしに「羅」字を用ひ、勿論「日」をラとして使用して居ることは、絶対ないものであり、あり得ないものであると思ふ。

抑も經名上部の「方等部古品曰」の末字「曰」を、下の「遺日說」に冠し「曰遺日說」として考察することは、果して妥當なる考へ方であるか。「遺日」といふ二字を冠した經は、獨り本經ばかりではない。即ち現存經典中に、既に「遺日摩尼寶經」があり、「遺日雜難經」がある。前者は「出三藏記集」の失譯部にも「佛遺日摩尼寶經」一卷として名の出て居るものであり、後者は譯經者に就いては、尙ほ疑問のものであるとして「歷代三寶紀」には、支謙譯として「惟越雜難經」一卷として、其の名を列ねて居るものである。若し是れがヴィジラの音譯で、下のジラだけが誤られて残つて居るものであるならば、正しくは「皆」曰を上に加へなければならないわけで「曰遺日摩尼寶經」或は「曰遺羅難經」としなければ意味のなさないことになるわけである。特に「歷代三寶紀」も何とかして「惟越雜」をヴィジラにしなくてはならないといふ苦心も入用となるわけである。斯る説は、決して公平なる學者の首肯を値するものとは考へらるべきもないことである。

既にヴィブルヤの音譯として「遺日羅」といふ言葉のある以上は「遺日羅」は「遺日羅」の寫誤といふに於て、聊も疑はない筈と思ふのである。况々此の「遺日羅」を「惟越雜」と音譯して傳へて居る以上は「曰」と「越」とは同一音と見れば、此の二つは共にヴィブルヤの音譯で「惟越雜」の下の「雜」字は、恐らく「羅」と同一音、或は之に近い音でなくてはならないから「羅」の誤つて「雜」となることが不可能とするならば、これは「雜」字ではなかつたかと想像

するの外はないと思ふのである。それとも「羅」の下畫の「維」の轉寫中に起つた誤傳かも知れない。斯う考へると「遺日雜難經」の名は、實は「遺曰雜經」か、或は「遺曰羅經」が本名で、下の「難」は、これも誤つて加はつたものに違ひなしと考へられるのである。これも前の『遺曰羅』の「曰」と四が日日となり、「遺日日說」と誤つたと想像される様に「遺曰羅」の「羅」字の下畫「維」が、轉々寫傳の間に、雜となり、同じ字が更に「難」となつて重複してしまつたものかと思ふ。さうでなければ、經の内容から見ても、此の經を「雜難經」とも、「難經」とも呼べるべき理由のないものである。此の經の大部は、釋尊の、菩薩として修行中の傳説に關する、種々の問題を取り扱つて居るものである。之を要するに「遺日雜難經」は、實は「遺曰羅經」即ち「方等經」若しくは「方廣經」となすべきもので、經中の譯語等から考へて、やはり支謙か支讖の譯には相違ないと想像せらるゝものである。

「歷代三寶記」は、此の「遺曰羅般若經」を「出三藏記集」によりて採錄し、即ち

古品遺日說般若經一卷出方等部、一名佛遺日摩尼寶經、一名大寶積經、見僧祐錄として掲げて居る。こゝには上部の「方等部」の三字を除き、註に「出方等部」として居るが、これは此の經に限りて特に「方等部」を冠するのは、奇怪なことであるから、何等かの誤りと判じて、普通の考へとしては、誠に穩當な考へ方である。尙ほ「古品曰」の「曰」字を除いたのも、此の一字の意味は全く解せられないと、他に「遺日」の二字を冠した經名の存するのとを考量して、單に「遺日」とし「曰」を上に加へないのが至當だと判断した結果であらう。これも全く至當な考方であつて、それは獨り費長房ばかりではない。「法經錄」等の諸經錄も皆同一であるのは、其の理由に基くものである。但し長房は、此の「遺曰羅般若」を

「摩尼寶嚴經」「摩訶衍寶嚴經」「大寶積經」などの異名を以て呼ぶ、同一經として居るが、これにも相等の理由があり、多分長房が内容を見て判断したものであらうと思ふが、然しこれは其のまゝ受け取るべく、危険の感がないでもない。費長房が、此等の諸經を同一のものと見做した理由は、内容が般若の空理を説いて居るといふに一致して居ることも一つの理由であらう。即ち般若經と呼ばるゝに決して不相應ではないからであらう。これは一々本文を引いて例證するのも煩はしいわけであるが、

「佛告<sup>ケタマハグニ</sup>迦葉<sup>ニ</sup>、又寧<sup>ロ</sup>著<sup>レ</sup>癡<sup>ニ</sup>大<sup>ナルコトク</sup>如<sup>ニ</sup>須彌山<sup>一</sup>呼<sup>ハスモ</sup>爲<sup>レ</sup>有<sup>ト</sup>、其過<sup>ル</sup>不<sup>足</sup>言<sup>フニ</sup>耳<sup>、</sup>人<sup>リテスル</sup>有<sup>レ</sup>著<sup>スル</sup>空<sup>ハバリト</sup>、其過<sup>ダナリ</sup>甚<sup>シ</sup>大<sup>シルモスルニ</sup>者<sup>、</sup>曉<sup>レバ</sup>空<sup>ヲ</sup>得<sup>レ脱</sup>、著<sup>レ</sup>空<sup>者</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>能<sup>スルコトヲ</sup>」とある、一節を見たゞけでも、根本空觀の立場は、容易に之を諒とすることが出来るのである。加之、前に挙げた如く、本經の文中に、明に「極大珍寶之積遺日羅經」といふ文字があるので、此の經を「大寶積經」とも、また「遺日羅經」とも見たのは決して不當でも無理でもない。普通から言って、先づ至當な判断といふべきであらう。さうして其の内容を比較すると、失譯の「摩訶衍寶嚴經」と全く同一で、唯異本の重譯であるに過ぎないことは明であるからつまり此の諸經は、皆同一經と結論したのも、無理のないことだと言はざるを得ないのである。

私もこの意味で「歴代三寶紀」によりて、一〇四名の説を認めて居たのであるが、後になつて考へて見ると、既に道安が此の「遺日羅經」を見て居るし、さうしてしかも此の「遺日羅經」と共に、別に「寶積經」一卷の名を並べ挙げて居る。さうして僧祐の註によると「安公云 一名摩尼寶、光和二年出<sup>ス</sup>」として居るところを見ると、此の「遺日摩尼寶經」と

「遺日說般若經」との一經の名の別々に存するところから判断して、道安が一經を二經として別々に誤記したと考ふべき理由は萬々ない。若し然ならば僧祐の時に既に闕失して不傳の經と註せられた「遺日羅經」は、今もなほ世に存せざるもので、現存の「遺日摩尼寶經」は、「遺日羅摩尼寶經」の正しい名に訂正せらるべき、これは「遺日羅般若經」とは別經であると断すべきものであらう。

以上